様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：２２４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６２９３４６５

研究課題名（和文）日本におけるがん看護外来のアウトカム評価指標の開発とがん看護外来の有効性の検討

研究課題名（英文）Developing an outcome evaluation index for an outpatient cancer nursing department in Japan and examining the department's effectiveness

研究代表者
飯岡　由紀子（Iioka, Yukiko）

埼玉県立大学・大学院保健医療福祉学研究科・教授

研究者番号：４０２７５３１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,100,000円

研究成果の概要（和文）：　がん看護外来の担当看護師、外来を活用する医師、外来の管理者、外来を利用する患者・家族を対象とした質的研究を行った。外来の主な実践内容は相談だった。外来の課題には体制の未確立と人材確保があった。がん診療連携拠点病院等への質問紙調査では、満足度、不安の緩和、QOL改善が重要と考える評価項目だった。これらの研究成果を基盤として、がん看護外来の評価指標を開発し、webシステムを開発した。Webシステムの臨床における実現可能性が確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　がん患者の増加やがんサバイバーの増加により外来診療は多忙を極めている。一方で、がん患者は、生活と治療の両立や治療選択に悩んでいることが多い。このような悩みの相談窓口として、専門的な看護師が相談に応じるがん看護外来が発展してきた。だが、その効果は系統的に評価されていない。本研究は、がん看護外来の効果を明確にするための指標を開発した。評価指標によって効果が明確になると、がん看護外来がより発展し、療養上の苦悩を抱く患者に適切な支援が提供されることにつながると考える。

研究成果の概要（英文）：We conducted qualitative research on nurses in an outpatient cancer nursing department, doctors using the department, administrators in the department, and patients and families utilizing the department. The main practice of this department was consultation. The issues in this department were the incomplete establishment of a system and securing human resources. The evaluation items in the questionnaire survey targeting designated cancer care hospitals considered to be important were satisfaction, alleviation of anxiety, and QOL improvement. Based on these results, we developed an evaluation index and web-based system for the outpatient cancer nursing department. The clinical feasibility of the web-based system was confirmed.

研究分野：看護学

キーワード：看護学　がん看護学　外来看護　アウトカム　評価指標

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

超高齢社会の到来、医療費高騰、在院日数削減、在宅医療の推進、化学療法を始めとした治療の外来への移行などにより、医療が外来及び在宅へとシフトしてきている。一方で、看護は病棟看護が主流であり、変化に追いついているとは言い難い。今後、患者や家族が安心して外来通院したり、在宅療養ができるには、外来看護をより発展させることが重要課題と考える。

看護師の運営で成り立つ看護外来は、全国で増加しつつある。看護外来は、ストーマ、リンパ浮腫、緩和ケア、乳がん、前立腺がんなどの専門外来が増えている。担当者は認定看護師や専門看護師が多い。だが、外来の名称、担当者、提供内容や運営方法は、施設独自の形態で運営されており、統一していない。

また、がん診療連携拠点病院などには「相談支援センター」が設置されている。センターの主な目的は情報提供であり、業務内容には「がん患者の療養上の相談」も含まれているが、予防・早期発見の情報提供やセカンドオピニオンや医師の紹介などが明記されている。一方、外来通院治療中のがん患者からは、「仕事をしながら治療を続けるにはどうしたらよいか」「医師と治療の話はするけどそれ以外について相談するところがない」等の訴えを聴く。つまり、がんサバイバーは、「療養上の相談」を中心とした看護を求めていると捉えることができる。そのため、看護実践を主体とした独自の外来として発展することが望ましいと考える。本研究では「相談支援」ではなく「看護外来」として捉える。

この看護外来が発展するためには、その有効性を明確に示す必要がある。だが、系統的な評価は実施されていない。看護ケアの質評価の研究は 1980 年後半から行われ、看護 QI プログラムなどが開発されている。これは３要素モデル（構造、過程、結果）を基にしているが、外来看護の質評価でもこのモデルを基盤とすることが重要だが、本研究でその全てを扱うには研究の積み重ねが充分ではないと考える。従って、看護外来の有効性を評価することを優先し、結果（アウトカム）評価に焦点を当てることとした。

以上から、日本の医療事情や看護事情を踏まえ、看護外来の実態を反映したアウトカム指標の開発が必要と考えた。

２．研究の目的

日本のがん看護外来の実態を踏まえ、その効果を評価するためのアウトカム評価指標を開発する。また、がん看護外来を新設する施設において、その有効性を評価する。

３．研究の方法

(1) がん看護外来のアウトカム評価に関する文献検討

PubMed、医中誌 web を活用した。がん看護外来で効果が示されるアウトカムにはどのようなものがあるかを検討した。

(2)がん看護外来の担当看護師を対象とした質的研究

病院ホームページや文献などにより、がん看護外来を積極的に実施・運営している施設を抽出し、研究協力が得られた 6 施設のがん看護外来担当看護師 6 名を対象とした。半構造化面接にて、主なケア内容、担うべき役割、今後の課題を調査した。分析は内容分析を用いてカテゴリー化した。研究倫理審査の承認を得て行った。

(3)がん看護外来を活用している医師を対象とした質的研究

病院ホームページや文献などにより、がん看護外来を積極的に実施・運営している施設を抽出し、研究協力が得られた 6 施設の医師 5 名を対象とした。半構造化面接にて、看護外来への期待、連携状況を調査した。分析は内容分析を用いてカテゴリー化した。研究倫理審査の承認を得て行った。

(4)がん看護外来の管理者を対象とした質的研究

病院ホームページや文献などにより、がん看護外来を積極的に実施・運営している施設を抽出し、研究協力が得られた 6 施設の管理者 6 名を対象とした。半構造化面接にて、看護外来への期待、連携状況を調査した。分析は内容分析を用いてカテゴリー化した。研究倫理審査の承認を得て行った。

(5)がん看護外来を利用する患者・家族を対象とした質的研究

研究協力施設のがん看護外来を利用した患者 5 名を対象に、半構造化面接を行った。がん看護外来の利用者の観点から、がん看護外来の看護師の実践内容や患者のニーズを調査した。分析は内容をコード化し、類似内容でカテゴリー化した。研究倫理審査の承認を得て行った。

(6)全国のがん看護外来の実態調査

対象は、がん看護外来担当看護師とした。厚生労働省が指定しているがん診療拠点病院など 427 施設の看護部代表者宛に研究協力依頼書と自記式質問紙を郵送し、がん看護外来の担当者に渡すよう依頼した。質問紙は、がん看護外来における看護実践の頻度と重要度、がん看護外来の有効性の評価、がん看護外来の今後の課題、がん看護外来の役割に対する認識、対象者の特性で構成した。研究倫理審査の承認を得て行った。

(7)がん看護外来のための評価指標（ケアアセス）の評価

(1)～（6）の研究成果を基に、評価指標を開発する。更に、評価指標の運用方法も検討する。開発した評価指標を臨床で活用していただき、実現可能性を検討する。実現可能性は、活用した外来担当看護師への質問紙調査を行う。介入は、評価指標を 3 カ月間活用することとした。研究倫理審査の承認を得て行った。

４．研究成果

(1) がん看護外来のアウトカム評価に関する文献検討

医中誌 Web による検索では採用文献はなかった。PubMed による検索では、検索式の検討を重ねて「nurse clinic」のキーワードを加えて 92 件の文献を抽出した。アウトカム指標には、QOL、満足度、コスト（費用効果）、受診回数、検査の回数と割合、心配事、抑うつ・不安などが活用されていた。多くの研究で満足度が活用されていたことより、日本語の満足度尺度を収集し、本研究での活用について検討した。だが、がん看護外来の評価として適切な尺度を見つけることができなかった。

(2) がん看護外来の担当看護師を対象とした質的研究

対象者のがん看護経験年数の平均は 14.3 年であり、外来看護経験年数は平均 3.3 年だった。担当看護師の看護実践では、がん看護の相談に向けた準備を行い、患者・家族が思いを表出しやすいように支援し、必要な知識を提供していた。更に、必要な場合には他職種に紹介するなど多職種と協働して問題解決を図っていた。主要となる実践内容は「相談」であり、相談に応じて柔軟な対応を行っていたため、多岐にわたる内容が語られた。今後の課題としては、がん看護外来の役割を伝えられていないこと、体制が整っていないことなどを認識していた。担当看護師は、患者・家族の思いや悩みに寄り添い、丁寧な支援を提供しているが、発展に向けて課題への取り組みが必要であることが明らかになった。

(3) がん看護外来を活用している医師を対象とした質的研究

医師の専門領域は乳腺外科、婦人科、腫瘍科だった。医師は、医師の治療だけではサポートできない部分を看護の視点から支援することを重要視していた。がん看護外来を利用することによって有用であると肯定的に受け止めていた。しかし、診療報酬が得にくい、マンパワー不足、システムの未確立、広報不足などの課題を認識していた。がん看護外来の発展には医師との協働が不可欠であり、連携強化とシステム構築に向けた取り組みの必要性が明らかになった。

(4) がん看護外来の管理者を対象とした質的研究

がん看護外来運用期間は平均 2.7 年だった。管理者は、がん看護外来を「がん患者・家族が抱える思いや悩みに対して支援する場」として認識していた。がん看護外来の看護実践は、患者の真のニーズと意思決定の方向性を明確化するために有用であるが、人員確保と人材育成が課題と認識していた。また、がん看護外来担当看護師の意欲や自信が関係するとも認識していた。管理者は、がん看護外来に期待しており、人材育成の必要性を感じていることが明らかになった。

(5) がん看護外来を利用する患者・家族を対象とした質的研究

対象者のがん看護外来利用回数は平均 9.4 回であった。看護外来を利用する患者のニーズでは、相談する相手を必要とし、情報過多社会において意思決定の一助となる信頼できる情報の必要性が述べられた。利用者の観点に基づくがん看護外来の看護実践では、患者の必要な情報を提供し、主治医とのコミュニケーション上の調整役であったり、専門職へ紹介するなど患者のニーズに柔軟かつ迅速に対応をしていることがわかった。

(6) 全国のがん看護外来の実態調査

調査票を送付した 427 施設のうち、がん看護外来を開設しているのは 116 施設であり、開設していないのが 172 施設だった。担当者の多くは、がん看護専門看護師や認定看護師だった。がん看護外来に専従しているのは 4 割程度だった。看護師が多く実践していることは、不安の傾聴と緩和、治療選択に関する意思決定支援、症状コントロールの支援であり、重要性が高いと認識している項目と同様の結果だった。アウトカムとして重要性が高いと認識していることには、患者・家族の満足度、QOL の改善、不安の緩和などであった。担当看護師の職務満足度は高く、やりがいを感じていた。しかし、アセスメント能力の向上、心理的支援の向上など多様な課題を抱いていた。

以上の結果から、がん看護外来はまだ発展途上にあり、開設している施設が限られた。また、担当看護師の職務満足度は高いが、同時に多様な課題を抱いていた。

(7) がん看護外来のための評価指標（ケアアセス）の評価

評価指標は、利用者である患者・家族による評価と、ケア提供者である外来担当看護師による 2 つの方法で行うこととした。患者・家族による評価は 12 項目の設問から成り、満足したか、今後の見通しがみえたかなどを尋ねる。看護師による評価は 19 項目の設問から成り、行った看護実践の適切性を問うこととした。がん看護外来の主な実践は相談であるため、実践内容は非常に個別性が大きいため、この 2 つの評価指標は、1 事例毎に評価できるようにした。

その為、時間がかからず、簡便で扱いやすい Web システムで運用するよう開発した（ケアアセス）。

全国のがん診療連携拠点病院など 427 施設に研究参加の意向を確認した。6 施設からの協力意向があったが、同意が得られた 4 施設の担当看護師を対象とした。ケアアセスの導入では、がん看護外来利用者に高齢者が多く、操作を極力簡便にしたにもかかわらず、iPad やスマートフォンを扱ったことがない患者が多く、質問紙で回答する施設も含まれた。また、iPad やスマートフォンで操作できたとしても、看護師が操作を指導したり確認する必要が生じる事例もあり、その対応に時間を要することもあった。結果として、実現可能性は確認できたが、利用者に高齢者が多いため、Web だけでなく多様な評価方法を選択できる体制を整える必要があることが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2　件）

・飯岡由紀子：実践を変える研究【2】何がどこまでわかっているのかを理解する：文献レビュー、がん看護、査読無、23（3）、347-351、2018
・飯岡由紀子：実践を変える研究【5】あらためて研究課題から研究デザインを考える、がん看護、査読無、23（6）、619-623、2018

〔学会発表〕（計　6 件）

・飯岡由紀子、峯川美弥子：がん看護外来の看護師が抱く今後の課題－全国調査の結果から－、第 22 回聖路加看護学会学術大会、2017
・飯岡由紀子、小林礼実、鈴木香緒理、峯川美弥子、河合育世：日本におけるがん看護外来の看護実践－全国調査の結果から－、第 37 回日本看護科学学会学術集会、2017
・小林礼実、鈴木香緒理、峯川美弥子、河合育世、飯岡由紀子：がん看護外来に対する病院管理者の認識に関する質的研究、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016
・鈴木香緒理、峯川美弥子、小林礼実、河合育世、飯岡由紀子：がん看護外来に対する医師の認識に関する質的研究、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016
・峯川美弥子、小林礼実、鈴木香緒理、河合育世、飯岡由紀子：がん看護外来における担当看護師の看護実践と課題に関する質的研究、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016

〔図書〕（計　2 件）

・飯岡由紀子、和泉俊一郎、伊藤真理他 41 名、篠原出版新社、チームで学ぶ女性がん患者のためのホルモンマネジメント、2017 年、292（245-251）
・飯岡由紀子、他 15 名、青海社、がんの親をもつ子どもたちをサポートする本、2017 年、136（128-134、107、119、120、121、123）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：高松潔
ローマ字氏名：Takamatsu Kiyoshi
所属研究機関名：東京歯科大学市川総合病院
部局名：産婦人科
職名：教授
研究者番号（8 桁）：30206875

研究分担者氏名：小林礼実
ローマ字氏名：Kobayashi Ayami
所属研究機関名：東京女子医科大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8 桁）：00623076

研究分担者氏名：峯川美弥子
ローマ字氏名：Minekawa Miyako
所属研究機関名：東京女子医科大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8 桁）：90366500

研究分担者氏名：鈴木香緒理
ローマ字氏名：Suzuki Kaori
所属研究機関名：東京女子医科大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8 桁）：50713012

研究分担者氏名：河合育世
ローマ字氏名：Kawai Ikuyo
所属研究機関名：東京女子医科大学
部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号（8 桁）：60609288

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。